
とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

lapaid

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

【Zコード】

Z5019Y

【作者名】

lapaid

【あらすじ】

ある日私は真っ白い空間にいました。そこには自称神と名乗る人物が。

話を聞けば転生させてくれるそうです。何でも神様のミスだとか。所謂テンプレってやつですかね？

希望を聞いてもらつて、向かう世界は「魔法先生ネギま！」だそうです。まあ、魔法やらなんやらで危険ではありますが、楽しめそうではありますね。

田が覚めると……えつ？なにこの設定？いや、悪いことは言こませんけど……ハア…

初投稿です。アンチ、チート、原作改編、自己流解釈など結構やらかしますので気を付けて下せー。

第一話（前書き）

初投稿です。

拙い文章ですがお楽しみ頂ければ…

第一話

「知らない天井ですね。」

取り敢えずいつてみたかったこの台詞。
周りを見回しますが真っ白です。何もありません。距離感がおかしくなりそうです。

「どうか、何故こんなにいるのでしょうか？」

それに、もう一人が居なのです。

「すまんのう……」は何処でも無い場所じゃ。」

いきなり「いかにも」な方が現れました。
驚きましたよ。

「その通り。儂は神じや。」

「GODの神ですか?なんにせよ説明を頂きたいのですが。」

「ここは本来死ぬべきではない人物の来る場所じや。」

「本来死ぬべきではないとは?」

「儂は名前こそ無いが最高神での。部下がミスをして本来寿命でない人がここに来るのじや。」

「役所が個人を管理していた書類をシュレッダーにかけて再起不能

になつたつて感じですか?「

「そんな感じじやの。とこつかお主の言つた出来事のままじやが。」

「うわあ……でもなんか……うわあ……

「セイは申し訳ない。セイ、セイに来た人物は主に三通りの選択肢があるだい。」

「三通りですか。」

「うむ。

「一つ田はまのまま天国に行く」とじや。普通の輪廻に交じるところじや。

二つ田はまじで仕事をする。下級神となつて、人の管理をする。もつとも、ワーカホリック位しか選ばんがの。

そして三つ田、一次元の世界に転生する」とじや。

「では三つ田で。」

「早いの?…まあどれを選ぶも個人の自由じやからの。こく世界は決まっておるが良いかの?これは決めた後にしか伝えられんのじやが。」

「ええ。三つ田でお願ひします。」

「ふむ…行く世界は『魔法先生ネギまー』じや。お主の記憶を見たが、この世界を知つておるようじやの。」

それで、じゃ。行くに当たつて希望したいことはあるかの?三つまでなら聞くぞい?」

「おつと、先に言つておぐが、氣や魔力は最初は平均より高めじや。特訓すればしだけ伸びるようになつておるぞ。あとは不老じや。」

「おつと、先に言つておぐが、氣や魔力は最初は平均より高めじや。特訓すればしだけ伸びるようになつておるぞ。あとは不老じや。」

「20歳からの不老じやの。」

「意外とありがたいサービスがついていた！ とするとまずは…」

「東方 Project のハ雲紫の能力、『境界を操る程度の能力』をもらえますか？」

「ほつ…なかなか良いのを選んだのう…それに見合つだけの演算能力もつけよつ。」

「これはありがたい。

「では…『魔法先生ネギまー』の世界の魔法や氣の知識を頂けますか？」

「知識だけだと使用はできんのじやが、良いかの？」

「それは特訓すればいいんでしょ？」

「その通りじや。使用出来る状態からスタートも出来るんじやが、それでも良いかの？」

「ええ。構いません。自分で特訓するのが好きなので。3つ目ですが、原作の大戦に関われるよつこしてもらえますか？」

「なるほど……了解じゃ。もう一人はちゃんとこるから安心してもよいわ。」

「元気には居ないですか？」

「向こうに着いたらわかるでしょ。」

「やうですか。」

心を読まれたのはサラッと流す。

「ではお主を送るから。ゆっくりと世界を楽しんで来るがよい。」

神の言葉を最後に、私は意識が落ちた。

第一話～麻帆良武道会～

「んにちは。転生した「私」です。
確かに大戦に関われるようにしてもらえますか?」と言いましたよ。
言いましたとも。

ですが

「ユニーが麻帆良か~すげえな!強いやつと戦えるぜー。」

横にいるコイツ、誰だと思います?

そうですよ。ナギ・スプリングフィールドですよ。

「戦いたいのは分かつたから。エントリーしに行きますよ。」

「そうだつたな!んでユキ、何処か分かるか?」

「ガイドブック読めばわかるでしょうに…向こうですね。それっぽい人もいますし。」

私の名前はユキ・スプリングフィールド。ナギの双子の姉として生まれました。

ちなみに転生したというのが分かつたのは5歳の時、それから『境界を操る程度の能力』が使えるようになりました。

で、私は10歳で魔法学校を卒業、旅に出て行方をくらませようかとしたらナギが中退してついてきました。

あ、卒業後の課題はなかったですよ?あの仕組みは大方大戦後に出来たんでしょう。

行方をくらませよつたとした理由は単純で、能力を手に入れたのをごまかそつかと思つたんです。

どうせじばりくしたらゲートポートに行つて魔法世界に行くんでその時にもやりますが。

「ドンッ！」

「あ、すみません…」

考え事をしていたのでぶつかつてしましました。見上げると若い青年です。大きな野太刀を背負つていますが。

「いやらしさすまなかつた。考え方をしていたもので。」

「おーお前強そうだな！武道会に参加するのか？」

「ああ、そのつもりさ。君たちはどうするんだい？」

「私たちも参加するつもりです。貴方とは当たりたくないですね。中々の手練れのよつなので。」

「はは。そう言つてもらえると嬉しいね。」

「俺は戦つてみたいぜ！お前、名前はなんだ？俺はナギ・スプリングフィールドだ！」

「私はユキ・スプリングフィールドです。」

「俺は青山詠春さ。それじゃ、健闘を祈るよ。」

そのまま軽く礼をして歩いて行きました。

詠春でしたか…まだ近衛では無かつたんですね。

そのまま歩いて行き、エントリーしました。ちなみに私が参加すると言つたときの参加者名簿をつけている人の驚き方は凄かったです。まあ、見た目はただの女の子ですからね。

さて…大会が始まりました。予選はバトロワ形式でした。一言で言わせてもらつと

「雑魚ばっかり」

でした。見た目で人を判断してはいけません、ということを思い知らせましたよ。

んで、本戦です…が、結論から言います。私とナギ、詠春意外は雑魚でした。

私は『戦いの歌』で身体強化、そのまま肉弾戦に持ち込んで勝ちましたよ。準決勝の相手も軽くいなして、次が決勝戦です。さて、ナギ対詠春ですね…しっかり見ておきましょつか。

ナギはフットワークをいかして詠春の懷に潜ろうとします。が、詠春は野太刀を振るつて追い払い、そのまま神鳴流を決めようとします。あれは…斬空閃でしたか？

あ、ナギが障壁で防ぎました。やつと防御を覚えましたか。そんなやりとりがしばらく続きましたが、二人とも動きが止まりました。時間が押してくるからお互いに威力の高い技で決めるつもりですかね…

台詞が無いですって？結構離れてるから声が聞こえないんですよ。解説はもはや機能してないですし。どういうことか？いや「すごい」だの「派手」だのしかいってないのですよ。

おや？ナギはあんちよこ見てますね。読唇術で…何々？「ベカトンタキス・カイ・キーリアキス・アストラ・プサトー！」って…なんの事か分からぬ？日本語にします。「百重千重と重なりて、走れよ稻妻！」ですよ。

ナギは「十の雷」、詠春は「雷光剣」、2つがぶつかって煙が上がります。

ゆづくりと煙が晴れていきます。立っているのは…ナギでしたか。審判が10カウントといひ、ナギの決勝進出が決まりました。

ナギが控室に戻ってきました。

「どーだ…勝つて…やつたぜ…」

息も切れ切れに話してきました。

「お疲れ様です。まあ良いじゃないですか。派手に壊したおかげで決勝は1時間後ですよ。」

「1時間あればなんとかなるぜ…絶対に勝つてやるからなー！」

「私も負けるつもりは無いですよ?」

今はゆづくりと過ごしました。

「さあこりよによ麻帆良武道会も決勝戦…今までハイレベルな戦いを見てきましたが、ここで終わるのが惜しいくらいです！さあ、決勝戦の選手を紹介しましょう！先ずは一人目、ユキ・スプリングフィールド選手です！」

私がリングに上ると歓声が上がります。

「こまだ10歳の女の子ながら、敵を瞬殺する実力は本物です！ま

ともな試合を見ていない気がしますが、この試合ではどうなるでしょうか！

では「人田です！ナギ・スプリングフィールド選手です！」

ナギがリングに上ると、同じように歓声が上がります。

「こちらも一〇歳の少年ですが、先程は素晴らしい試合を見せてくれました！それまでの相手はほぼ瞬殺、やはり実力は本物です！そして、この二人は双子なのです！双子同士の戦いのどちらに軍配が上がるのか！」

「本気でいきますよ？」

「当然だ！俺が倒して優勝するぜ！」

「威勢は良いですね。私も優勝を狙うので。」

「それでは、試合…開始！」

「『戦いの歌』！」

お互に無詠唱での戦いの歌、一気に距離を詰めます。

拳を出して、受け流され、ナギが掌底。それは読んできますよ。そのまま手首を掴み、放り投げます。

放り投げたところまで一気に瞬動、回し蹴りで叩き落とします。

「グッ！」

ナギは背中から叩きつけられましたが、身体強化もあってそこまでダメージは無さそうです。そのまま立ち上りました。

「マンマンテロテロ…」

「…リラ・力・マギカ・ラ・エレメンタ…」

呪文詠唱は予想外でした…すぐに始動キーを唱えます。

「来たれ雷精、風の精、雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐…」

「来たれ氷精、闇の精、闇を従え、吹雪け常夜の冰雪…」

「『雷の暴風』！」

「『闇の吹雪』！」

ドオン！

「くつ…！『魔法の射手 連弾 光の10矢 水の10矢』！」

爆風で吹き飛ばされながらも、魔法の射手で反撃。雷の暴風は打ち消しきれなかつたですからね…！

「うお…？お返しだ！『魔法の射手 連弾 雷の20矢』！」

ナギも黙つてやられるわけもなく、打ち返してきました。最初の1、2発当たつただけ良しとしましょう。

チラッと残り時間を見ますが、もう2分もありません。ナギに目配せすると、すぐに理解してくれました。

「マンマンテロテロ…契約により、我に従え高殿の王、来たれ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆」

「リラ・力・マギカ・ラ・エレメンタ…契約により、我に従え炎の霸王、来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣、ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄」

「百重千重と重なりて、走れよ稻妻！」
「罪ありし者を死の塵に！」

「『千の雷』！」

「『燃える天空』！」

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオン！

轟音と共に、凄まじい爆発が起きました。
急いで障壁を張り、衝撃と爆風を防ぎます。

「タイムアップ！」

煙が晴れていきます。ナギは立つていました。

「な、なんと！両者とも無事です！今回の優勝者は一人！ユキ・ス
プリングフィールド選手とナギ・スプリングフィールド選手です！」

「ちえー…引き分けかあ…」

「全くです…ま、負けなかつたんですけどね？」
「納得はできないけど、仕方ねえな。」

第三話～都合主義～

SHDEユキ

どつも、ユキ・スプリングフィールドです。

えー…只今トルコのイスタンブール、魔法世界へのゲートポートです。

武道会が終わって、ナギと詠春が意気投合、その流れで『魔法世界』に行こう!って成りました。

まもなく準備が完了するはずですが……お?

巨大な魔法陣が現れました。いよいよ転送ですかね?…って私だけ別に魔法陣!…どういうこと!?

考えを巡らせるまもなく転移されました。

ガサツ

痛たた…えーつとここは森?何故に?W h y?

混乱してこらへ、ヒカラと一枚紙が落ちてきました。手にittてみます。

『じつじや～ネギまの世界を満喫しどのかの～といつてもまだ大戦すら始まつて無いんじやがの～。

今回はちょっとしたサービスじゃ。お主は『境界を操る程度の能力の練習がまるで出来んかったじやろ～ひでナギや詠春とは別に転移をせてもらつただい。

ただこれだけだとサービスにも何にもなつておらんじやろ～から、ダイオラマ魔法球を送つとくぞい。なんと外の1時間が中での1年になると重つものじや。

さういふお主が認めぬ限つは見る」とも触れる」とも出来ん特別製じやー。

もううん中の環境は整えてあるぞ? 食料は10年分はあるから。職業は適当に探してくれの。

なお、この手紙は読み終えたら自動的に消滅するぞ。

そのまま手紙は存在が薄くなり、消えてしまった。

ドサッ

田の前に落ちてましたよ。魔法球。手のひらサイズ。

えーっと、状況を整理すると…

・ナギたちと別行動に

・魔法球（特別製）GET！

・職業は自分で探せ

つてことですか…

(……い……おい…)

「ふえつ…?」

いきなり声が聞こえました。なんなんでしょう…

(俺がわからねえのか？お前のこいつ「もう一人」だよ…)

(あ…あなたでしたか…びっくりしたんですよ?)

(何が「あなたでしたか」だよ…つたぐ、すっかり俺のこと忘れやがって…)

(こや、気にならなかつたところが何とこつか…)

(正直に言えよ…忘れてたんだろ？いい加減俺も表にでるぞ…)

(わかりましたよ…暴れないでくださいね?)

(わーかつてゐよそのへりご。)

「ふう…久しぶりに表に出たぜ…」

(しようがないでしよう…あなたが表に出る機会が無かつたんですから…)

「お?こんなとこに女のガキがいるぜ!」

「いいじやねえか!身ぐるみ剥いて慰み物にしてやろうぜ!..」

(ちょいどその機会がやつて來たぜ)

(程ほどこしてくださいや…)

ん?俺が誰か、だつて?まあ後で説明するから待つてくれ。

数は…5人。野盗の類か?

「だーれが好んで慰み物になるか。さつさと滅べ。『凍てつく氷極』

!

パキン!

氷付け…だが3人か。無詠唱なら上出来か?

「「なつ……」」

おーおー畠然としてやがる。まさか10歳のガキがこんな呪文使えるとは思ってなかつたか？

俺は浮遊術を使って空中に飛び上がる。が、アイツらはポカーンとしてやがる。逆に腹がたつな。

「追つてこれねえとは情けねえなあ！ま、お前らはここで死ぬ運命をー！」

俺の名前は零崎雪織！てめえらのきく最後の人間の名だ！」

（リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ　おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ）

頭の中で詠唱、このくらいには容易いもんだ。

「『冥府の石柱』！」

ドッ…ガガガガガ！

巨大な6角形の石柱が空洞を開けるように6本、閉じ込められたところにトドメの一一本。そのまま下衆どもを押し潰した。つてゆーか

抵抗無しかよ。まあ抵抗してもどうにでもなつたがな。

一分待つたけど反応なし、こりや死んだな。

「ハツ…ちょろいな。」

(え、えー……)

さてと、適当に暴れて気分も晴れたから説明しようか。

俺とユキは同一人物で別人格。平たく言えば二重人格だ。

転生前、ユキは性同一性障害だった。その結果イジメを受けた。

何度もイジメを受けているうちに、ユキは女としての人格を生み出して、それが主人格になつたんだ。今思えばどんなレアケースだつて話だな。

んで、俺は半ば封じ込められたんだが、元々の人格は俺だ。何度も呼び掛けると、ユキの精神と繋がつた。

始めは会話が出来るのがやつとだつたが、その内に表に出る人格を操作出来るようになつた、つて訳だ。

んで何だかんだで転生したんだが、ユキが俺のことをすっかり忘れてやがつたから表に出るのが遅れた、つて感じだな。

以上、説明終了！

（まあ… もう良いですよ。それにしても零崎名乗るってどうなんですか？）

（別に良いだろうが。まさに裏人格って感じで。）

（ハア…）

なんか溜め息ばつかだな。ま、原因は俺だけだ。
それと、これからどうすつかな…

第四話～キングクリムゾン～（前書き）

「JRでもJR都合主義が発動

第四話～キングクリムゾン～

SHDEユキ

「さあて…殺して解して並べて揃えて晒してやんよー。」

(どうも…只今裏人格のユキ・スプリングフィールドです。

あ、大戦が始まったので私は「泉野雪」と名乗っています。)

ズドオン!

(あれから魔法球の中で西洋魔法の修行を5年程。おかげで大抵の魔法は無詠唱で使えるようになりました。)

ガガガガガガッ!

(その後は日本で神鳴流の修行。門外不出の『式の太刀』も教えてもらいました。

どうやったのですって?運が良かつただけなんですが。)

ピキ…パキ…

(何やら妖怪退治に失敗したのか今にも殺されそうになっていた子

供を助けたところ、青山家の一員だったんですね。取り敢えず保護して本山に向かいました。）

バリィイイイイ！

（長に「なにか出来ることはないか？」と言われ、「神鳴流を教わりたい」と詫びと口が貰えたのです。約1年程で修めました。

それから再び魔法球にこもって、5年程咸卦法の修行をしました。居合い拳もつかえますよ~）

「あーあ。零崎終了か。」

（只今の職業は主に依頼されて賞金首を狩っています。エヴァ以外。主に雪織が。）

「わい、報告に行きますか。」

（あ、やつやつ。雪織は魔法…スキマも応用して姿を変えています。髪や瞳の色は黒色に、んでもって黒いローブを羽織ります。）

「スキマは…別にいいか。歩いていくか。」

(ちなみに得物は黒い鎌。これは魔法球レベルの金がかかっています。魔力や気やらを最も流しやすい金属で出来た特別製。同じように刀も作りました。)

「ただもう少し歯心えのあるやつでも良かつたかな。」

(得物が鎌だから雪織は「漆黒の死神」なんて呼ばれます。私ですか?私は特に何もしてないので二つ名なんかありませんよ。)

「そんな感じで俺たちは過いじてゐる、って訳だ。」

(台詞といないで下をこよ…まあ山程喋つたので後は雪織に任せます。)

んで、さつきの戦闘だが、『雷の暴風』、『魔法の射手 連弾 光の101矢』、『おわるせかい』の3つだ。

実は『おわるせかい』は一段構えなんだぜ?

「としえのやみ、えいえんのひょうが」まで凍結、そのあとに碎くまでが一つの魔法だ。『こおるせかい』の場合は永久凍結するまでが一つの魔法、つてことだ。

つと、説明していく間に到着だ。

「依頼完了だ。」

「ふむ…これは報酬の5000ドルクマジヤ。それにしても見事な戦いぶりじゃったな。」

俺は取り残した場合金を一切受け取らない、絶対に後金にする、といつ一つの条件でいつも依頼を受けている。

依頼料は本来の手配金額の5割。希望すれば遺体現場につれていくことや、生け捕りも可にしている。その場合は手配金額の6割で依頼を受けている。

ちなみに指名手配されていない場合は依頼人に金額を決めてもらっている。

そのおかげか信用度はかなり高い。今回は依頼人が遠見の魔法が得意だったらしく、1から観察していたようだ。

「そりやどーも。次があつたら依頼してくれ。もっとも、いないかもしれんがな。」

俺は魔法世界を放浪している。理由はスキマ移動のためだ。

スキマ移動は一度見たことがある場合とない場合とで大きく難易度が変わる。

見たことがない場合は正確に座標を決める必要があるので、洞窟内等には開けないので。

適当に移動していると、新聞の記事が田に入つた。「次の戦闘は『紅き翼』の参加か！？」だと。

ちよつといいか。あの愚弟の顔と『紅き翼』^{ナギ}の実力を見に行くかな。

第五話～VS『紅き翼』～

S H D E ナギ

よう一・ナギ・スプリングフィールドだ！

俺は今、『紅き翼』って名前のギルド？で戦争で活躍している魔法使いだ！

メンバーは俺、旧世界からついてきてる詠春、途中で仲間になつたアルビレオ・イマに俺の師匠をしているゼクトの4人だ！アルは「重力魔法」が使えるし、ゼクトは見た目はガキだけどすげえ強い！

で、今は何をしてるかつーと、帝国側が撤退したら急に強い魔力を感じたから、そこに向かつてる途中だ。

今まで一番強く感じたから気になつてるんだ。

「む…？」

お師匠がなんか気づいたみたいだ。俺も田をこらすと、なんか黒っぽい人間が見える。

近づいた途端、そいつは口を開いた。

「てめえらが『紅き翼』か？」

女みたいな声だな。

「ああそりゃ。お前は何なんだ？」

「俺が何者か、ねえ。そこの白いローブを着た男、アルビレオ・イマ。気づいているんじゃねえか？」

「ええ…私の推測が正しければ、『漆黒の死神』、零崎雪織でしょうか？」

「なんじゃとーあの賞金首を狩つてているところ奴か！？」

「大正解だ。今回は帝国側からの依頼でな。『『紅き翼』の実力を見てこい』とのことだ。おっと、殺しは無し、って話だったがな。」

『漆黒の死神』って聞いたことねえけどなあ…

「じゃあお前は強いのか？」

「さあね。今回の目的はてめえらの実力を見る」と。1対1がいいか、1対多がいいか、選べ。」

随分上から目線で腹が立つな。

「おつと、逃げるのは無しだぜ『サムライマスター』青山詠春。もし背中を見せたら…」

「い！？

「い！？」

声の聞こえた方を向くと、アルの首に大鎌が添えてあつた。できる

な「イツ…

「わい、どうする?」

「いいも。1対1でやつてやひひじやねえか。」

「ふうん…じゅ、順番は俺が決める。アルビレオ・イマ、青山詠春、ゼクト、ナギ・スプリングフィールドの順だ。途中で手出しするなよ?」

「仕方あるまい…いつたん離れるや。」

お師匠と詠春、俺は一人から離れる。するとアイツもアルから離れた。

「ヒヤヒヤしましたよ…死ぬかと思いました。」

「俺は殺すなとは言われたが、根本が達成できそうにないなら手段は選ばん。精々あがけよ?『魔法の射手 連弾 閻の101矢』」

SIDEユキ

一気に魔法の射手が向かつ。

「はつー!」

黒い球体…重力球か。まああれくらいなら普通に落とせるみな。

んでもって俺の方に飛ばしてきた。

「あらよつと」

ま、俺も使えるんだがな。重力球にたいして重力球をぶつけてかき消す。

そのまま虚空瞬動で懐に入る。

「『闇の吹雪』」

お？ 障壁はつたか。とはいえほぼゼロ距離攻撃は効いたみたいだ。 フラフラしてゐし俺を見失つたか。

「『魔法の射手 戒めの風矢』」

「くつ……！」

命中、束縛成功。後は降参させるだけ。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ……おお地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ」

掌は上に向けて

「『冥府の石柱』つと…どうだ？ 降参か？」

「…無理ですね。降参です。」

ま、今の間に首を刈れば人生が終わつてたからな。当然と言えば当然か。

「まずは一勝。次だ。」

すべての魔法を解除。次にやつて来たのは詠春。

「俺は殺さないが、おまえらは殺す氣で来ていいんだぜ？」

影のゲートを利用して刀を取り出す。

「先手は譲つてやる。来な。」

「なら遠慮なく行くぞ。神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！」

バカでかい気の雷が落ちる。が、結界で防ぐ。ってか一回打つて動き止めたら無意味だろ。

「どうした？この程度か？」

無傷だし、挑発してやる。

「ならば！神鳴流奥義！斬魔剣　式の太刀！！」

「神鳴流奥義。斬魔剣　式の太刀」

式の太刀は式の太刀をぶつけることで相殺が出来る。

「なつ！？」

ま、どういう技か知ってるから防ぐことも出来るけどね。縮地で詠春の真後ろに移動。

「考え方する暇があるのか？神鳴流奥義　斬岩剣　式の太刀」

おもいつきり横薙ぎに振る。わざとだが。
それをなんとか避けて、詠春が斬りかかつてきた。防ぐよりこして、
そのまま鍔迫り合いに。

「何故貴様が神鳴流を使える…！」

「自分で考えな。つと！」

わざと力を緩め、体制が崩れたところで鳩尾に掌底。

「グフツ！」

「神鳴流奥義 雷鳴剣」

吹っ飛んだといひに雷鳴剣、そのまま直撃。これより威力あげたら死ぬからな。

一気に移動して詠春を掴み、アルに向かつて放り投げる。

「軽度の全身火傷。適当に治療しどけ。次」

ゼクトか…戦法は無詠唱の中火力魔法の連発だったか？

「お主は出来るようじやからの…油断はせんぞ！」

「おつとー！」

いきなり飛んできたのは熱線。『燃える天空』かよ。
かと思えば次構えてるし。

「『雷の暴風』…」

「『闇の吹雪』…」

相殺、爆煙が上がるが正直なところ油断は出来ない。といつわけで

「『冥府の石柱』！」

といひ構わず石柱投擲。さて…

「む…『最強防護』！」

当たり。声が聞こえれば位置は分かる。一気に瞬動で後ろに移動。

「…『障壁突破 雷の斧』」

「な…ぐつー」

もろに命中。まあ死なない程度に威力は調節してある。

(『斬魔剣 式の太刀』だつたら死んでますしね。)
(なにしてたんだ? 今の今まで黙つて。)
(ちょっとした精神統一ですよ。)

「『魔法の射手 戒めの風矢』」

んで拘束。そのまま鎌を突き付ける。

「これにて終了、か?」

「じゃの…手も足もでんわい。」

といつかこの状況から反撃出来る人がいたら見てみたいもんだ。
(その前にあなたは首を落としてるでしょう~)
(まあな。)

「さて… 最後。ナギ・スプリングフィールド。てめえだ。」

「はつ…今までの仇、返してやるぜー。」

「出来るんならやってみな。」

「行くぜー!『雷の暴風』!」

結界を張つて受け止める。

つーか術式適当だな…バカみたいな魔力で強引に発動してるだけだろ?

(ムラがかなりありますしね。この際実力差をはつきりさせてはどうですか?)
(だな。)

影のゲートでナギの真後ろに転移。

「ねえ。」

「なん…ブヘツ!」

ただ単に殴つただけです。あ、雪ですよ?ゲートの時に入れ替わりました。

「あなたが打てる中で一番威力が高い技を打つてください。相殺してあげます。」

「なーいつたなてめえ!やつてやる!じやねーか!」

ブツブツと呴えてます。『千の雷』以外あり得ないわけですが。

「行くぜー！『千の雷』！…」

「『雷の暴風』！」

普通なら『雷の暴風』はかき消され、『千の雷』が私に直撃します。が、

「なつー！？」

魔法陣見て威力が薄くなるところを計算して打ちました。結果、相殺してお互いの魔法が消えました。

今度は瞬動で移動、刀を首に突きつけます。

「弱い。」

「くつ…」

かくして、『紅き翼』との戦闘は私と雪織の勝利に終わりました。

さて、事情を説明しますかね……

第五話～VS『紅き翼』～（後書き）

戦闘です…が正直上手く書けません…
なにかアドバイスがあればお願ひします！

それからアンケートです。

今は大戦期なわけですが、そのうち原作本編に入ります。そこで、
麻帆良でのユキの立場をアンケートしたいと思います。

- 1 教師
 - 2 女子寮管理人
 - 3 喫茶店などの店主
- 以上の3つから選んで下さい。
一人一票でお願いします。

期限はユキが麻帆良につくまで…結構時間はあります。

第六話～THE・説明～（前書き）

アンケート実施中です！

ユキの麻帆良での立場について。

- 1 教師
 - 2 女子寮管理人
 - 3 喫茶店などの店主
- 以上の三つから選んでください！

第六話～THE・説明～

SHDEユキ

「ま、実力も分かったことですし。ネタばらしとしましょうか。」

「は？」

私はフードを外し、長い髪を外に出す。ナギと同じ、赤毛の髪。

「な……な……」

呆然として声が出てませんね。当然と言えばそうですが。

「さて、ナギ・スプリングフィールド。私は誰でしょう?」

「ユキ……なのか……?」

まるであり得ない物を見たかのような表情。

「ええ、その通り。私はユキ・スプリングフィールド。あなたの双子の姉ですよ。」

「グスツ……良かつた……もう5年以上も経つて……戦争が始まつて……ズッ……ずっと会えねえのかと思つて……」

あらあら……泣き出しましたか。

「『』免なさい。辛かつたでしょ?だから良いのよ~強がらなくて。

「

ふんわりと優しく抱き締める。

「だから今はお姉ちゃんに甘えて？大丈夫。顔は見えないから。」

「う…あああああ…」

「数十分後、『紅き翼』基地にて
『さて…説明してもらえますか?』

そう切り出したのはアルビレオ・イマ。
ちなみにナギは隅っこで膝を抱えています。恥ずかしかったんですね。

「ええ。私はユキ・スプリングフィールド。先ほど会話通り、ナギの双子の姉です。」

「では、ナギが『会えない』と言つたのは何故でしょうか?」

「5、6年ほど前に、ゲートポート関連の事故がありました
か?」

「いえ、そのような話は聞いたことありませんが…」

「すると揉み消されたのでしょうか…私はナギ、詠春と一緒に魔
法世界を回るつもりでした。」

「つむり、とは？」

「何が起こうたのかは分かりませんが、私は転移の際、全く知らない森に飛ばされました。」

このあたりから嘘ばつかりになりますが。正直仕方ありません。

「とは言えここは魔法世界のどこかだろう、そう思って散策していると誰かは忘れましたが、賞金首に会いました。

襲われそうになつたので私は反撃しました。幸い私の実力を見誤つたソイツを無力化することができました。

で、どうしようかと考えているとどこからともなく人がやつてきました。説明を聞いて、ソイツが賞金首であることを知りました。

お陰で私は身に余るほどの大金を手に入れましたが、さすがに持ち運びが大変です。というわけで大半を使って24倍ダイオラマ魔法球につき込みました。」

「なんとこゝか…無茶苦茶ですね。」

「まったくですね。自分でも信じられない位です。まあ、かなりの金額があまりましたが、生きるために働いて金を稼ぐことが必要です。

とはいっても10歳の体ではほとんどなにも出来ません。というかそれともうされません。そこでかなりの年数魔法球に閉じ籠りました。

「

「食料はどうしたんじや？」

「最初に大量にお金を払つたのでなんとかなりました。で、魔法球の中ではひたすら魔法研究に取り組みました。

そしてある日のことですが、研究中の魔法を暴発させてしまいました。その結果としてですが、もう一人の私である雪織が生まれ、不老になり、さらにほんとこなことが出来るようになりました。

「うおっ！？」

スキマで詠春の前に手首から先だけ出してみました。予想以上の驚きっぷりですね。

「魔力などは一切感じんかったが、空間操作かの？」

「いや、これだけ見るとそうですが、詠春、水の入った容器はありますか？」

「なんに使うのかは知らんが…ほひ。」

キヤッチして弄つてリリース。

「熱つー！？」

「概念操作とでも言いますか。言つならば『境界を操る程度の能力』が手に入りました。」

「チートですか…といひで何故『程度』とつけているのですか？」

「出来る範囲が限られてるみたいですし。後は気分です。」

まあチート以外の何物でもないでしけどね。

「そうですか。」

「で、雪織が賞金首狩りを始めたんです。姿は私と区別をつけるために髪と田の色を黒色にしてます。」

「では俺からだが。何故神鳴流を使えるんだ？それも式の太刀まで。」

「

「あー…『泉野雪』って知っていますか？」

「うん？いつぞやに連絡があつたな。1年で神鳴流を修めたとか。」

「それ、私です。」

「なんだと…？」

「簡単に言つと暇潰しで京都に来てた時に青山家の人に助けた見返りとして教わりました。」

「そ、そつか…それで式の太刀まで使えるのか…」

「どこか納得いかない様子の詠春。ですが事実なので諦めて下さい。」

「お主の力では何が出来るのかの？」

「『境界』に関係する事象があれば大抵のことは出来ます。といふか何が出来て何が出来ないかは正確に把握してませんし。」

『屁理屈でもいいから境界を作れば弄れますし。死者蘇生と時間操作は出来ませんでしたが。

「んでユキは『紅き翼』に入るのか?」

お、ナギ復活。

「ええ、入りましょうか。」

こうして私は『紅き翼』に参加することになりました。

その後皆に私は『ユキ・スプリングフィールド』と名乗らず、『泉野雪』として名乗ることや雪織の性格や事情等を説明しました。

本名を言わない理由は「なんか嫌な予感がするから」とだけ言いました。まあ雪織が日本名なのもありますしね。

さて、戦争に入していくますか。

第七話～グレート＝ブリッジ奪還作戦～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場について。

- 1 教師
 - 2 女子寮管理人
 - 3 喫茶店などの店主
- 以上の三つから選んでください！

第七話～グレー＝ブリッジ奪還作戦～

SHADEゴキ

「は～、グレー＝ブリッジが落とされた？」

「ええ、やうなんです。」

どうも、泉野雪です。

私が『紅き翼』に参加してはや数ヶ月、あれから新たにジャック・ラカンが仲間になりました。

そして過ごしてきたところにこの一報。原作知識がなければ唖然とする以外にできそうにありませんでした。

アレの守りの固さは見ただけで分かるほどでしたから。

「一体何があつたんですか？アレが落とされるなんてやうやう考えられませんが。」

「大規模転移魔法による不意討ちだそうじゃ。それで指揮系統が狂つたんじゃやうつの。」

「で、その手紙はつまり私たちにグレー＝ブリッジを奪還せよ、つてことが言いたいわけですね？」

「まあしへその通りです。」

「よつしゃあ…せつやとこつてちゅうひちゅと奪還だー。」

「おひー!俺様も存分に暴れてやるぜー。」

「バカ一人は黙つて下さー。作戦も無しに行くとか愚の骨頂でしょ
うが。

アレの強みはブリッジを攻めれば上空から、上空を攻めればブリッ
ジから攻撃できることですよね?」

「構造を見た限りではそつだらうな。とすると一手に別れるのが良
いか?」

「ん~そうでしょうね。上空担当とブリッジ担当に別けて攻略する
のが良いでしょ。」

「では上空担当はラカンと雪がやるのが良いでしょ?」

「妥当な線ですね。ラカンとナギを合わせたら化学反応起こして暴
走しそうですし。ナギ、ゼクト、詠春、アルが4人で内部を攻略す
る、ところ」とですね。」

「上空担当のお主ら二人がいかに上手くやるかじや の。」

「その辺は任せて下せー。ハエ一匹たりとも逃さないようにして戦
つて見せましょ。」

「そーら、斬艦剣!」

いやせや。さすがラカンです。馬鹿デカイ剣を振り回して次々と戦艦を落としてこきます。

私はブリッジと上空を完全に分断するよつに結界を張つて攻撃をしています。ちなみに雪織はお休みです。

「『冥府の石柱』！『闇の吹雪』！」

私は戦艦に乗りりずに突撃しようとするやつを中級 上級魔法で撃ち落としてこます。結界を維持する必要があるので、さすがに広域殲滅魔法は使えません。

「『紅き焰』！『雷の暴風』！」

つーかやつをと撤退して欲しいですね。若しくはナギたちが早く奪還してもらいたいです。

「ははっ…さすがコキだな…じゃんじゃん無詠唱で唱えてやがる…」

「黙つて下さるラカン！結界を維持するのは辛いんですよー。」

『ユキーブレー＝ブリッジの奪還は成功だー今からやつちにいくぜー。』

『ちよつー待ちな』『ブツツ』……』

念話で成功報告の確認は良いんですが、いつに来る必要は無いんですけどね…

「まあいいです！ラカン！適当に離れなさいよ！」

結界を解除して、呪文詠唱開始。

“契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝”！

「あ、ヤベ！」

「『無幻の光槍』！」

カツ！ズガガガガガガ！！！

光系の広域殲滅魔法、無数の巨大な光の槍が降り注ぐ魔法です。『おわるせかい』等とは違い、確実性はほんの少し下がりますが威力は遥かに上回ります。

「ふい～危なかつたぜ。」

「離れろといったでしょ！」

「聞こえなかつたんだぜ？お前の声が。」

「そうですか。まあ貴方なら大丈夫だと思いましたし。」

あ、帝国軍が引いていきます。さすがにアレで壊滅的なダメージを受けましたからね。

「いや、さすがに俺様でもお前の詠唱つきのアレは食らつたら死ねるぜ？」

「おーいゴキー！って終わってるじゃねえか！」

そしてナギ登場。ゼクト、アル、詠春も一緒に。

「勝手に念話を切るからです。来る必要は無いと言ふようとしたんですけどね。」

「またぐのう…少しは落着きを覚える馬鹿弟子が。」

グレー＝ブリッジの奪還後、私は『属性を統べる者』といつ一つ名がつきました。色々な属性魔法を打つてたからでしょうか？
ハーメンタルマスター

後、ファンクラブが出来たそうです。以外と女性のファンが多いそうで…憧れでしょうか？

ただ、うわべだけを見るのは止めて欲しいですね。結局のところは人殺しですから…

第七話「グレート＝ブリッジ奪還作戦」（後書き）

「オリジナル魔法」

『無幻の光槍』

詠唱

”契約により、我に従え光の皇帝、来れ、不滅の光、破邪の神槍、
永久の輝きとなりて、降り注げよ光輝” 『無幻の光槍』

説明

光属性の広域殲滅魔法。

上空から無数の光の槍が降り注ぐ魔法。

他の広域殲滅魔法と比べ、確実性はわずかに落ちるが、威力は他を
はるかに上回る。

”降り注げよ”を”向かい射て”にすることでの自身の回りから射つ
ようにすることが出来る。

第八話～『完全なる世界』、そして反逆者～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場について

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

第八話『完全なる世界』、そして反逆者にて

S H D E ユキ

泉野雪です。

グレート＝ブリッジを奪還して早数ヶ月、辺境に飛ばされたりなん
だりするのは分かつてましたんで皆に事情を説明、雪織に本来の職
業である賞金首狩りをさせてました

時々帰つて来てみるといつのまにかガトウとタカミチ君が仲間にな
つてました。

取り敢えず自己紹介で『漆黒の死神』でもあることに驚かれました。

それから咸卦法と居合い拳使つたらまた驚かれました。ガトウは「
まさか女性でやる人がいるとは…」、タカミチ君は「凄いです！」、
他の人は「まあユキだからな。」といつ反応。

なんか最後の反応はムカつきましたよ。腹いせにラカンとナギをボ
コボコにしてやりました。二人から勝負を挑まれたんですよ？間違
つても私からは手を出してません。

さて、そんなこんなでガトウから連絡があつて、本国の首都に来て
います。

「んで、協力者って誰なんだ？」

そこに歩いてくる男性…もとい

「マクゲル元老院議員！」

煩いですよ詠春。大声出さないで下さい。そもそも…

「いや、ワシちやう。主賓はあちらのお方だ。」

前後の口調の差がひどいですね。ま、それはともかく。階段を上つてくるのは一人の女性。

「ウエスペルタティア王国…アリカ王女だ。」

美人ですね。いやはや。んで、横にいるナギを見るとボーッとしてます。アレですね。一目惚れつてやつでしょう。

一人一人自己紹介。そしてラカンは「気安く話しかけるな、下衆が。」と言われました。

さて、私の番です。

「お初にお目にかかりますアリカ王女殿下。私は泉野雪と申します。」

「おお…そなたが『属性を統べる者』か。」

「そう呼ばれていますが、所詮は一人の人間です。どうぞ宜しくお願いします。」

会合が終わり、暇な時間です。が、

「ワッハハハハハ！ 上手い事やりやがつて」んガキヤア！」

「ああ！？ なんの話だよ！…」

「とほけんじやねーよー あのお姫様トイチャイチャキヤイキヤイ
お喋りしてたるーが！この色男が！」

「なにがイチャイチャだ、バカつ！ してねつつの…」

「何言つてんだよ。俺なんか『気安く話しかける な、下衆が』だ
ぜ〜〜〜？ いやーありやイイ女だぜ。一本芯の通つたな」

「頭大丈夫かジャック？ マジかあんた？ 俺ああんなおつかねえ女、
はじめて見たぞ？」

喧しい二人であること。ホントに。

「しかしよ、ウエスペルタティアの王女つてこたーアレか？ 例
の姫子ちゃんの姉君つてことかよ？」

「いや、姫子ちゃんの事はなんか、話しひくいみ たいだつた

「へえ？ なんでだよ？」

「 知るかよ。俺だつて氣になつてんだつづーの 」

成長阻害や感情阻害の薬漬けにして自分の家族を兵器として利用し
てるんですから。辛いはずが無いです。

ま、これについては黙つておきますが。

「今は協力を取り付けただけ良しとしまじょ。それよりもこの戦争が伸ばされていくようを感じる理由です。」

「誰かによつて世界が滅ぼされようとしている、とこつアレですか。」

「荒唐無稽な話では無いからな。俺たちも調べてはいるが…」

「少し私は色々な場所を見て回つて来ます。あなたたちは別に調べてみて下さい。」

「了解だ。」

馬鹿一人はさつきまでのは何だったのか、また言い合ひをしています。ヤレヤレですね。

よう、零崎雪織だ。

俺といづイレギュラーのせいか、『完全なる世界』が見つかるのが遅れてしまつた。ナギとアリカのデータが今日で、すでに出掛けてしまつたようのが残念なところだ。

「『完全なる世界』？」
〔ズサ・エンドレケイア〕

「ああ。その組織がこの戦争を長引かせている存在だ。奴等も馬鹿じや無いのか、クラスやらアリアドネーやら、『紅き翼』では到底行けない場所でようやく尻尾を掴めたぜ。」

「俺たちも帝国と連合がどじかで繋がっているといつ情報は入ったが…」

「ん、上々だ。どうやら中枢にまで奴等は入り込んでいるようだ。ガトウとタカミチはその方面から調べてみてくれ。それから…重大なのはこれだ。」

「俺が取り出したのは一枚のレポート。そこには一枚の男の[写真]と、『完全なる世界』との結び付きを調べあげた文章。

「おいおい、コイツは今の執政官じゃねえかーMMのナンバー2まで奴等の手が入ってんのか！？」

「ソースは確かだが、確実な証拠が無い。周囲には話すなよ？」

そしてナギがデータから帰つきました。

今はクドクドと詠春が説教します、が手元に一枚の紙を発見。

「ちよつと落ち着いて下さい詠春。ナギ、その紙は何ですか？」

「ん？これが？なんかアジトを荒らしてたら見つけたんだが…」

「ちょっと見せて…」

[写りだす立体映像、そして語られる内容。まさに「ビンゴ…」でかした…】

「え？ 何がだ？」

「後で説明しますー。コイツがあれば戦争は一気に終わらせますー。」

しかし私は焦り過ぎて、一つやることを忘れてしまっていました。

ガトウがマクゲル議員に連絡して、弾劾裁判の準備を進めることがなりました。

そして法務員とマクゲル議員に会いに来たわけですが…

「法務員はまだいらっしゃらないのですか？」

「法務員は…来られぬことになった。」

「は？」

ミスつた！ 本物のマクゲル議員を保護するのを忘れていた！

「あれから少し考えたのだがね… 折角の勝ち戦だ… ここに来て水を指すのも… どうかと思つてね」

「はあ…」

「私の考えでは無い。 そう考える者が多い」と

「黙れ」

居合いで抜きで躊躇わざ首を狙う… が、手応えなし。 幻影か…

「ちゅひ… ノキーお前何してるんだ！？」

「や、ひれました… ナギは気づきましたか？」

「ああ。お前マクゲル議員じゃねえな。何もんだ？」

「気付かれたか…」

服が破れ、白髪の青年が姿を現す。

「なつ…？」

「よくわかったね、千の呪文の男に属性を統べる者。こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要だね。」

トランシーバーを取りだそうとしたのを狙おうとしたが

「ぐう！」

どこから…？影のゲートか？

「わしだ！マクゲルだ！『紅き翼』から暗殺されそうになつた！奴等は帝国のスパイだ！ああ、うむ！奴等の仲間もだ…今も狙われている…軍に連絡を…」

やられた。みればもう一人がラカンとナギの相手をしている。

「君達にはここで退場してもいいよ。」

「本体は既に海の中、か…」

スキマを展開して強引に味方を全員基地に送る。

「覚えてなさい『^{ブリーメム}1番田』。私たちの誰かが潰してあげるわ…」

驚いたような顔を見てから、私もスキマで逃げる。

それから程なくして、『紅き翼』には反逆者のレッテルが張られました。もつとも、

「昨日までの英雄が一転、反逆者か。ヌツフフ、人生は波乱万丈でなくつちゃな」

この馬鹿の思考は変わらぬようですが。

第九話『夜の迷宮』、救出（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

第九話『夜の迷宮』、救出へ

SHADEコキ

どうも、泉野雪です。

『紅き翼』が反逆者となつて数日、ガトウ達と私の調査によつて、アリカ王女とヘラス帝国のテオドラ皇女が『夜の迷宮』に閉じ込められていることが分かりました。

今は救助に向かうために作戦を考えているところです。

「そもそも雪の能力があれば容易く出来るんじゃ無いのか？」

たしかに詠春の言つことは分かります。ですが、

「無理です。」

「何故だ？」

「私の能力は移動に使う場合、座標の計算がいるんです。行ったことが無い場所である上に遺跡の中となると…」

「座標の計算、ですか？」

「ええ。あの能力の移動はほとんど転移魔法と変わりません。魔力が必要で詠唱も要りませんが。というか、そもそも一人がどこにいるのかが分かりませんし…」

「ふうむ…脱出には使えるのか？」

「ええ。それは可能です。」

「とすると、ナギとあなたで一人の救助、私たちは外からの敵を中に入れないようにする。いろんなところでしょうか？」

「それが最適解でしょう。では、明日に備えましょうか。」

作戦当日です。今は『夜の迷宮』が見える位置で、結界を張つて相手方に見えないようにしています。

「相変わらずお主の結界は反則じやの…」

「『見える』と『見えない』、その他もうもうの境界を弄つて作つてますから。」

「入り口の見張りは2人ですか…どうしますか?」

「出来れば私たちの相手があの2人と内部にいる奴になるようにして欲しいですね…無駄な体力は使いたくありませんし。」

「とすると…私たちが別の場所から攻撃を仕掛けるのが良いでしょうね。出来るだけ派手にやればそちらに集まるでしょう。」

と、ゼクトが転移の魔法陣を書いていますね。

「これで完成じゃ。今とは反対の位置、高度100メートルの場所

じゃの。」「

私とナギ以外の四人が魔法陣に乗りります。

「では、派手にやつて下さいよ?」

「おう!…まかせときな!」

「では…転移」

四人の姿が魔法陣と共に消えました。

ズ…ズン…

直後、ここからでも肉眼で見えるほどの大剣が出現しました。

「うひゃー!派手だな!」

「ラカンの『千の顔を持つ英雄』、斬艦剣ですね。では、こちらも行きますよナギ」

「おうよ!」

結界を解除。瞬間見張りの一人が気づきました。

「チッ…向こうは囮だつたか!」

飛んできたのは魔法の射手。ですがこの程度無問題です。

「『雷の投擲』…」

「咸卦法…居合い拳！」

ナギの『雷の投擲』が一人の心臓に突き刺さり、私の居合い拳がもう一人の首を折りました。

二人の息が無いのを横目で確認しつつ、中に突入です。

突入して早一時間、つていうかここ広すぎです！

「侵入者だ！」

「食い止め…」

パスッ

言い終わる前に刀で首を落としました。

「ひでえなお前…」

「聞く必要の無いことは聞きません。」

女王達の場所はここの中北部、もとい最深部だそうです。つていうかそう叫びながら襲いかかってきた馬鹿がいましたから。

「せめて苦しまないよ！」にしてあげてるんですよ……斬岩剣！』

ガラガラと音を立てながら壁が崩れますが、

「また外れ……いい加減にして欲しいですね…」

「やつだな……オラア……」

ドゴン！

ナギが走り、魔力で強化した拳で壁を殴りました。煙が晴れていき
ます。人影……！

「来たぜ、姫さん。」

「遅いぞ、我が騎士よ。」

「はあ……よつやく見つかりました。テオドリフ皇女は？？」

「ゲホッゲホッ……妾はこゝにじゅー！」

半ば瓦礫に埋もれるよつになつてこるテオドリフ皇女発見。

手をつかんで引っ張り出します。

「お主「は」紅き翼」かの？」

「ええ。私は泉野雪です。」

「なんとーお主が『属性を統べる者』か！」

「ええ。やうですが今はとりあえず脱出しますよ。」

やつてスキマを地上に开く。

「な、なんじゅーれはー…」

あ、初めてみればこうなりますよね… なんたつて目玉だらけですもの。

「ナギ、アリカ王女とテオドラ皇女を連れて飛び込んで下さい。外に繋がってます。」

「ゴキはどうすんだ？」

「私は外にいる詠春達に伝えます。振動も聞こえないですし、終わってるでしょう。」

「そうか。じゃあ先に行ってるぜー。」

そのままナギは一人を連れて飛び込みました。テオドラ皇女が「イヤじやー！」

って言つてしましましたけど大丈夫でしょう。

私はスキマを別に開いて、その中に入ります。

スキマの中で状況確認…あれ？ 敵兵の増軍？ 仕方ありませんか。

「おわー！ ゴキー！」

「ラカソーン？ とりあえず食い止めて。派手なので決めるから。」

呪文詠唱開始です。

「”契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風”！」

「イカソー離れるぞー！」

「『裁きの龍巻』ー。」

横向きに巨大な龍巻を打ち出すこの魔法。下手に属性魔法を打てばそのまま飲み込んで威力を上げ、そうでなくとも大量の真空刃が飛んでいく、風属性の広域殲滅魔法です。

「ふう…」

「やつあがじや。」

ゼクトに文句を言われましたが、適当に流しました。

その後はナギ達と合流、私たちは秘密基地に向かいました。

第九話～『夜の迷宮』、救出～（後書き）

オリジナル魔法

『裁きの竜巻』

詠唱

”契約により、我に従え風の帝王、来れ、全てを切り裂く不可視の刃、地を海を空を走りて、巻き起これよ旋風”『裁きの竜巻』

風属性の広域殲滅魔法。

横向きの巨大な竜巻を打ち出す。弱い属性魔法は飲み込んで威力を上げる特徴を持ち、味方による強化も可能。

竜巻の内部は大量の真空刃が飛び交っているため、当たった物はあつという間にズタズタにされ、塵になる。

真空刃によつて切れない物はほとんど存在しない。ダイヤモンドでも真つ二つにしてしまう。

第10話『紅き翼』基地にて（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

第10話『紅き翼』基地にて

SHDEコキ

さて、アリカ王女とテオドラ皇女を救出し、秘密基地に戻つて来ました。

「何だ、『紅き翼』の秘密基地とはどんとこいかと思えば、掘立小屋ではないか！」

「逃亡者に何を期待してんだよこのジャリせ。」

「何だ貴様！無礼である！」

「へつへん。生憎ヘラス皇族には貸しあつても借りはないんですね。」

「何い？貴様何者だ！」

とまあ騒ぐ一人がいるわけですよ。

ただテオドラ皇女はまだ幼いので、どうもラカンがからかっているようにしか見えないので…

（いや、實際そうだな。）

（おや久しぶりですね雪織。）

（てめえがずっと表に出でていたからだろ？…暇なんだよ俺は。）

(そうですか。まあ後でちよこつとやつてあげますよ。)

そしてナギの方をみると、アリカ王女と話しています。

「じゃが…主と主の『紅き翼』は無敵なんじゃな?」

そして聞こえてきた会話。これは見ないと。

「世界全てが敵、良いではないか。こちらの兵はたったの8人、じやが最強の8人じゃ。」

「へつ…」

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が楯となり、剣となれ。」

「やれやれ…相変わらずおつかねえ姫さんだぜ…」

ナギがアリカ王女の前に跪きます。やっぱり様になりますね。

「いいぜ姫さん。俺の杖と翼、あんたに預けよ。」

原作での名シーン、やはり立ち会えるのは嬉しいですね。

「さてと…ナギがアリカ王女に忠誠を誓つたことですし、私も正体を明かしましょうか…」

「なんじや？」

「私は泉野雪、『属性を統べる者』。それであると同時に……」

黒いロープを羽織り、同時に魔法を使って姿を変える。

「零崎雪織、『漆黒の死神』でもあるので。」

おやあ？突然の事についてこれでねえな。

「じゃ、じゃが『漆黒の死神』は鎌を持っているところへ…どうな
んじや？」

「鎌、かあ。これのことか？」

「ひつ……」

「おいおい…ただ出しただけでビビるなよ…まあ子供には恐ろしいか?

「それは…本物か？」

「ん？俺がどうこうじゃなくて、鎌が本物かどうかを聞くとはなあ。
ま、こいつは本物だぜ？魔法発動体もあるしなあ。まあ…」

俺は一人にこの事を伝えるのもあつたが、別にやりたいこともある
んだよ。

「久しぶりに派手にやりたくてなあ…ナギー・ラカン…」

「お？ やんのか？」

「いいじゃねえか！ 久しぶりにやつてやる！ じやねえのー！」

「たまには強い奴とやりてえんだよ。良いか？」

「あたりめえじゃねえか！」

「俺たちはまだお前に勝つてないんだぜ？ 断るわけねえだろ？」

「ハハッ！ じゃあやるつか！」

魔法球を取り出す。ちなみに時間差は24倍。

「こらなかでやるぞ。流石に外でやつたらどうしようもならねえからな。」

SIDEアル

突然雪織がナギとラカンの二人に勝負を仕掛けました。

私としても興味があつたので、魔法球に同行させてもらいました。ちなみにタカミチ少年が一緒についてきています。ハイレベルな戦いを見るのも良い経験になるでしょう、とは思ったのですが…

「ラカン・インパクトオ！」

「『雷の暴風』！」

「ハハハハ！ どうした？ その程度か！」

「バキ！ ドゴォン！」

どうもあの三人は周りへの被害を考えないようで、大量に流れ弾が

飛んできます。タカミチ少年はそれを避けるのに精一杯のようですが、かく言う私も重力魔法を使って流れ弾を落としているわけですが……

といふか雪織は規格外にも程があります。今だつて一人の攻撃を無詠唱の『冥府の石柱』で受け止めましたし……おかげで岩が大量に降つてきましたよ。

「『燃える天空』！」

「「ちよつー」」

ズドオン！

「だあ———てめえ雪織！殺す気か！？」

「！」の程度で死ぬタマジヤねえだろ！そうちもつ一発！

ズドオン！

いや、思わず突っ込みたくなりますが、広域殲滅魔法を躊躇なく打ち込む精神には、ですよ？

無詠唱とか魔力量についてはもう気にしないことにしています。あと適性属性についても。

彼女の適性属性を調べたら全てに適性がありましたよ。広域殲滅魔法は適性がないと使えませんが、彼女は全属性の広域殲滅魔法が使えますから……

なんというか、理不尽に思えるくらいです。バグとかチートとかで収まるんでしょうか？

そういうえばすっかり忘れていた事がありますね。この戦闘が終わったら、『半生の書』に記録をせてもらいましょうか。

SIDEゴキ

きつかり一日を魔法球の中で過ごして、外に出ました。ああ、そう言えば突然神様から手紙がきましたよ。内容は

「アルビレオ・イマの『半生の書』については、お主が事情を説明したように載るが。お主が転生者であると言えば真実が載るようになる手を加えたぞい。

このくらいのサービスはしどとんとの。それじゃ、元気での。」

という物でした。この手紙を読み終えた直後にアルから『半生の書』に載せてもらいか聞かれたので快諾しておきました。

あ、勝負の結果ですか？雪織が勝ちました。といか途中からスキマを使って理不尽な攻撃をしていましたからね…

そして今は

「ん~もつむつと魔力を多くしてみて？」

「ハイ…この位ですか？」

タカミチ少年を鍛えているところです。

機能の戦闘が終わってから、物凄くキラキラした目で

「僕を鍛えて下さい！」

つて言われたんですね…断るのもアレでしたので。

「もひ少し…もひ少し…ストップーその感覚よ。」

「ん…反発が凄いですけど…」

「一番反発が大きいことが魔力と氣が同量だつて事を示してるのはよ。」

「せうなんですか…でも何でそれが分かるんですか?」

「私も咸卦法を取得するために努力したからね。」

おかげで魔力や氣の量についてはほぼ完璧に測定が出来ます。

「それで、咸卦法を成功させるには『自分を無にする』必要があるんだけど…」

「それは分かるんですけど、イマイチ感覚がつかめなくって…」

「いわゆる『無我の極地』ね。こればっかりは上手く説明が出来ないからね…」

私は自分の中の境界を無くす」となんて楽にできますし。

「詠春と一緒に座禅を組むのが良いかしら?」

「座禅、ですか?」

「そう。アレは『無我の極地』に自分を追いやりつゝする一つの方

法だからね。」

「ナリですか……じゃあ今度一緒にやつてみます。」

「うそ。あ、あとまでは下手に他の事に手を出さないようにな。お元気よ。」

「どうこいつですか？」

「これはまだタカミチ少年には分からぬいか。」

「どうあれタカミチ君はガトウさんを師匠にしておるわけでしょう? だからまずは『無音拳』と『咸卦法』をマスターする」と。下手に別の武術に手を出しても良いことは無いわ。」

「何故ですか?」

「うーん……簡単に言つと器用貧乏になる可能性が高いのよ。出来るだけ少ないことに集中して、極めるほうが強くなれる。」

「私だって最初は魔法だけひたすら努力したのよ?」

「そうなんですか…分かりました!」

「元気よく返事をしてくれました。」

「ま、なんかタカミチが強くなるのがはやくなるかも知れないけど、良いですかね。」

第10話『紅き翼』基地にて（後書き）

タカミチ強化？

なんといつか中途半端な終わり方です…

第十一話 決戦（前書き）

アンケート実施中です
ユキの麻帆良での立場は…
1 教師
2 女子寮管理人
3 喫茶室などの店主
以上の3つから選んで下さい。

第十一話 決戦

SHADE ゴキ

どいつも、泉野雪です。

前話からおよそ半年…え? メタ発言をするな、ですか? 別に良いじゃないですかそのくらい。

「ホン。それはともかく、この半年間はひたすらに暴れました。

『紅き翼』 泉野雪として表から『完全なる世界』の手駒を潰し、『漆黒の死神』 零崎雪織として裏から情報収集& a m p; 依頼という形でのやはり手駒潰し… 抹殺つて言つまうがしつくづきますけど。

そんなこんなで映画にして三部作、単行本にしておよそ14巻分の活躍劇を演じました。

そういうしてこるうちにアスナ姫が捕まり、『完全なる世界』は準備完了、私たちは奴らを追い詰め、現在は『墓守り人の宮殿』に攻め混もうとしているところです。

「不気味なくらい静かだな、奴ら。」

「悪い組織なんてそんなものです。なめられてこるんでしょう。」

まあこんなときは静かになりますよ、普通。

「ナギ殿…帝国・連合・アリアード・ネー混成舞台の準備完了しました
！」

セラスさんが準備が整った事を伝えます。

「それで…あの…ナギ殿、雪様。」

「ん？」

「なんですか？」

「ササ、サインをお願いしても良いのでしょうか？」

「うふ~ああここ。そのへりご。」

ナギはサインを書き込みます。私もサインを書いてみます。

「あ、ありがとうございます。」

緊張感のない娘ですね…まあ良いですけど。

そしてガトウから連絡、北アフリカ正規軍は遅れるとのこと。説得は

間に合わないらしい。延長出来ないか聞いてきましたが、

「残念ですが、既にタイムリミットです。」

「ええ、彼らはもう『世界を無に帰す』儀式の準備は整っています。

『黄昏の姫巫女』は彼らの手中にあるのです。」

それを聞いて、ナギが飛び出しあります。

「待つて。私は外の軍勢をあらかた潰してから行きます。だから露払いくらいは。」

「なんかやんのか？」

「ええ。どびつきの魔法を。」

そのまま宙に浮き上がり、準備開始。

「……『燃える天空』術式固定……『じおるせかい』術式固定……
『千の雷』術式固定……」

ぐ……流石に3つ、広域殲滅魔法を固定するのは辛いですね……

「術式連結……完了!」

純粹な魔力でその3つを繋ぎ合わせます。形は三角形。

「行きます…『神々の黄昏』…」

打ち出し、一気に相手の軍勢の真ん中まで飛ばし…

「『解放』」

カツ！ズドオオオオオン！

超広範囲に大爆発。衝撃はここからに来ないよう始めから術式を組んであります。

煙が晴れると、殆どの軍勢は跡形も無くなり、残っているわずかも重傷。ここまでやれば良いでしょう。

「『』のバグが…」

「努力の塊と言つてくださいな。」

「じゃあ皆、突っ込むぜー！」

ナギたちは『墓守り人の宮殿』に入つていきました。

さあて、私は生き残った悪魔とかの殲滅をしますかね。私は刀を取り出して咸卦法を発動しました。

「ふう……このくらいでじょうか……ねつー」

私は見える範囲の敵は全て斬り落としました。最後の一體を斬り捨てます。

ゾクッ

恐ろしい魔力…『造物主』か！

(ミスつたな。)

(全くです。急ぎます。)

直ぐに『闇の魔法』を発動、両手で『千の雷』を掌握。

一気に雷化で移動。魔力の大きい方に向かいます。

(二)

(もうすぐだ。準備しどけ。)

(ええ)

「ナギ！ ゼクト！ 退いて！ 『解放・千の雷』×2！」

ズッドオオオン！

「古キ！」

「私がいつまでも外に居るわけには、いかないんですよ！」

ズドドドドドド！

無詠唱『無幻の光槍』を打ち込む。いくら奴でも堪えるでしょ……

「ツク……フハハハハハ！」

笑い出した…雪織

(おひ。演算開始だ。)

「私を倒すか人間！それもよからう！私を倒し英雄となれ！羊達の慰めにもなるうー！」

「腹のたつ物言いにたいして無言で『雷の投擲』を打ち込みますが、避ける素振りも見せずにくらいました。

「だがゆめゆめ忘れるでは無い！全てを満たす解は無い！いずれ彼等にも絶望の帳が降りる！貴様らとて例外では無い！」

「「ぐだぐだ、うつさあああい（るつせえええ）ー。」

一人して造物主をぶん殴る。

「「たとえ明日、世界が滅ぶと分かっても！それでも諦めないのが人間つてもんでしょうが（だろうが）ー。」

「くつ…貴様らもいざれ知るだろう…私の語る『永遠』こそが『全ての魂』を救い得る、唯一の次善解だと。」

「かはつ！？」

後ろから攻撃……ゼクトを乗っ取ったか……

「お師匠！？」

「自らに問うがいい。人は果たして救うに値するものか？」

（解析完了済みだ。やりな。）

「ゼクトから、離れようよおおー！」

ゼクトをぶん殴り、造物主を引き剥がす。不滅の特性から、造物主は元の肉体に宿る。

「ぐ……人間は度しがたい。英雄よ、貴様らも我が2600年の絶望を知るがよい……さらばだ。」

そつ言つて、造物主は異世界へと消えて行きました。

「お師匠！」

「つ……大丈夫でしょ……傷はついてない……氣を失っているだけです

…「

強引にスキマを開き、送り返す。

「お、おーー！」

ここからは私の領分…奥まで一気に進みます。

アスナは水晶のようなものに閉じ込められて居ました。

私は水晶に触れます。急に取り出して、悪影響が無いか確認するためです。

（ちつ…残念だが発動回避は無理だ。）

（やはりですか…仕方ありません…）

パキイイイン！

内と外の境界を弄り、アスナを取り出します。それと同時に、アスナを閉じ込めていた水晶は砕けました。

ボウ
…

「…」

(こよいよ発動か… わたせと逃げるべー…)

(ええ…)

スキマを開き、アスナを抱えてそのまま倒れこみました。

ドサッ

スキマから落したといひて、『紅色翼』のメンバーたちは固ました…

「ユキー！」

「はは…演算のし過だ… どう…少し寝かせて… ぐだ… やこ…」

「お、おこー！」

「アスナの…面倒を誰か…見ておいてください…」

それだけ言つて、私の意識は闇に落ちました

第十一話「決戦」（後書き）

ゼクト生還。ユキ（作者）がしたかった原作ブレイクの一つです。やはり微妙な終わりかた…アドバイスがあればお願ひします！

オリジナル魔法

『神々の黄昏』

呪文等はとくに無し。

『燃える天空』、『いおるせかい』、『千の雷』の3つの魔法を固定、魔力によって連結させて打ち出す。

『解放』によつて固定を外すことで、3つの魔法を同時に発動させる。

ユキはあらかじめ衝撃の範囲が広がりすぎないように術式を組み込んでいる。

威力については相乗効果によつて測れないほど上がっている。ならば『超広範囲殲滅魔法』

第十一話／目覚め、一時の別れ／（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
 - 2 女子寮管理人
 - 3 喫茶店などの店主
- 以上の3つから選んで下さい！

第十一話 目覚め、一時の別れ

SHADE グキ

「ん……う……」

「」は……ベッドの上……？

「ユキ、起キタ？」

「アスナ……ちやん……？」

「ウン。」

私を覗き込むように見るアスナ。えっと……何があつた……？

私は確か……『墓守り人の宮殿』でアスナを助け出して……そのまま皆のところに移動して……

（そこで氣絶したんだぜ。）

（ああ……そうでしたね。）

「今、誰か他の人はいる？」

「アルビレオ。」

アルが居るってことでしょうね。

「呼んできてくれる？」

「ワカツタ。」

「クリと頷いて、トテトテといった感じで歩いて行きました。

（どのくらい寝ていたのでしょうか…）

（さあな。だが、嫌な予感しかしねえ。）

少し考へていると、アルがやつて来ました。

「起きましたね…気分はどうですか？」

「まあまあです。寝起きですし。」

「それは良かつたです。」

いつもの胡散臭い笑みではない、素直な微笑を見せるアル。

「さて…私が寝ていた間に何があつたか説明していただけますか？」

アルの顔が曇りました。

「いざれは教えることですし…良いでしょう。アリカ王女が捕まりました。」

（やられたな…かなりの間氣絶していたみたいだな。）

「……何が起こったか、最初から説明してください。」

「はい……あなたがアスナ姫をつれてきて氣絶した後、『世界を無

に帰す』ための魔法が発動しました。これについては帝国・連合・アリアードナーが協力し、『大規模反転封印術式』を発動させることで『墓守り人の宮殿』と封印し、解決しました。』

「『大規模反転封印術式』ですって？そんなもの使つたら…」

「あなたの考えている通りです。その数日後、オステイアで終戦記念式典が行われ、お祭りムードの大騒ぎ。運悪くその時にオステイアで魔力消失現象が発生したのです。」

「アレは恐ろしい量の空氣中に浮かぶ魔力を使います…そのしわ寄せがオステイアに向かつたわけですね…空氣中の魔力が消失した場合、浮遊している岩は落下するはずですよね？」

「その通りです。オステイアは崩落を始めました。これを解決する方々は見つからず、アリカ王女が『王家の魔力』を使用、オステイアは地上に不時着しました。」

「犠牲者を可能な限り減らす最善策ですね…これだけだと罪にはならない筈ですが？」

「ええ。問題だつたのは、オステイア崩落が始まつてからのアリカ王女の動きが早かつたこと。結果として『完全なる世界』との結び付きをでつち上げられたんです。」

さらに同時にクーデターを起こした際の『父親殺し』の罪も被せられました。」

「『父親殺し』についてはアレが『完全なる世界』と結び付いていたといふのに… MMのクズどもが…」

「……続けます。そうしてアリカ王女は捕らえられ、今はケルベラス無限監獄に居るはずです。」

「死刑囚専用の監獄か……執行までのタイムリミットは？」

「当初の発表では2年です。正確な日付などはまだ分かりませんが…」

「ふうむ…今の『紅き翼』はアリカ王女に『一人でも多くの命を救え』的なことを言わされて実行中、ですか？」

「……まさにその通りです。紛争地を巡り、巻き込まれた人たちの治療をしています。」

「でもクルトは参加していないんじゃないの？彼の事だから、政治面をどうにかしようとしたと考えてるんじゃない？」

「よくわかりましたね…その通りですよ。あなたはどうあるんですか？」

「私は…基本単独行動でしそうね。少し裏でやつておきたいことがありますし…」

「そうですか…止めはしませんが、ホドホドにしてくださいよ?」

「まあもう暫くは休みますが。まだメンバーとも会つてませんし。」

さて、裏での仕事は何をしますかね…やっぱり残党潰しちょつか?

「それでですね…出来ればあなたにアスナ姫を預かつて欲しいのですか？」

「はい？」

今、何て言ったこの人？

「大変なのはわかりますが…やはり男だけでこのよつな少女を育てるのには無理がある、という結論が出ているんです。」

「はあ。」

「私としては非常に不本意ではあるのですが、もしあなたが単独で行動するのであればお願ひします。」

この変態ロコロコが…幼女を手放す…だと…

「分かりました…預かりましょ。」

「ありがとうございます。」

「ワタシ、ユキニツイテイクノ？」

「もうござりとですよ。」

数日経つての夜です。

「やうか… ノキは一旦離れるのか…」

「私にも考えはありますし、『紅き翼』の一員であることを辞めるわけじやありません。」

「アリカ王女についてはどうするのかの?」

「それのために動くんですよ。こうこうの場合独り身の方が楽です。まあアスナを連れていくわけですが、大丈夫ですよ。」

詠春とラカン、ガトウ、タカミチは既に酔いつぶれています。わりと静かなのはそのためです。
アスナはとっくにおねむですしね。

「なあユキ…俺は何が出来るんだろ?」

「ナギらしくも無い。何が出来るか、じゃなくて何をするのか、が大事なんですよ?あなたは頭もたいして良くないんだから、思うがままに動けば良いんです。」

「そうか… そうだよなあ…」

あらり?寝ちゃいましたか。慣れもしない酒なんか飲むからですよ。
まったく…

とりあえず毛布をかけておきました。

「ナギと言えばユキはナギと今の「つけ」に仮契約はしないのですか？」

「ブツ！ ゲホッゲホッ！」

「マイシは…

「いきなり何を言い出すかと思えば…私は血の契約の陣も魔力宝石の陣も、魔力を流し込むだけの陣も書けますよ？ 果ては偽名のまま仮契約出来てなおかつ本契約並みのアーティファクトが使える陣も作りましたよ？」

「それなら良いじゃないですか？」

「あなた分かっていいてるでしょう？ 対象者が寝ていても使えるのは、キスの陣だけだ、ってこと。」

「バレましたか…」

「ナギの始めて唇を奪つていいのは彼女だけですよ……それに、私はアーティファクトは必要無いですし。」

「ん~残念です。」

「なんというか、締まらないなあ。

「さて、それでは私は離れますね。」

「マタネ、ミンナ。」

「おうー、『恋を叶へなー』」

「次に会つ日を楽しみにしておけやー。」

「アスナ姫のこと、頼んだぞ。」

「また会える日を楽しみにしておけや。」

「ワシもじや。達者での。」

「次にアスナ姫と会える日を楽しみにしておけやよ。」

「次会つときは、絶対にお前に勝つてやるからなー。」

さて、暫くの別れです。

魔法も使ってアスナを杖から離れなによつとして。

「じゃあ、また会つ日までー。」

一気に飛んでこります。

さて、何処に行つて何をしまじょうかね。

第十一話～目覚め、一時の別れ～（後書き）

以下ネタバレ

一時の別れといつても次回には会流するんですけどね。
つまり次回は2年後のことになります。

第十三話～クルトとの通信～（前書き）

アンケート実施中です
ユキの麻帆良での立場は…
1 教師
2 女子寮管理人
3 喫茶店などの店主
以上の3つから選んで下さい。

第十三話／クルトとの通信

SHIDEユキ

よつ。零崎雪織だ。

あれから別れて約2年、俺は『完全なる世界』の残党潰しを主にやつていたぜ。

たまには紛争地に出向いて治療とかもやつていたがな。

色々な場面をアスナに見せたことはいい方向に向かったみたいだ。
感情も知識も育つてるからな。

アスナが魔法から離れることは絶対に出来ない。俺がその気になれば暫くは断絶出来るだろ？が、それはまやかしだろ？

ただ、旅の途中いきなり『力が欲しい』って言われたのは驚いたがな。大方アスナ狙いの敵が何度も来てたからだろうが…

これについては「泉野雪」で仮契約をして、とりあえずある程度の体術をつけることで納得させておいた。

まだ体が成長してないのに筋肉つけると絶対に悪いからな…ただ、センスが良すぎるのは考え方だ。あつと言ひ間に身につけちまた。咸卦法も完璧に使えるし…どうしよう？

あ、アーティファクトは『ハマノツルギ』だ。だが調べたら原作以上にえげつない効果を持っていた。

魔法無効化はそのままに、本人の意思で『反射』が使えるとか…何なんだよ！？どこの一方通行だよ！？ついでに結界も張れるとかもつと意味不明だよ！？

対魔法使い最終兵器といつてもおかしくない性能だ…成長して剣術覚えたらどうなるんだろ？いや、覚えさせるつもりだけど…

つと、そんなことを考えてたら通信だ。なんだ？

『もしもし…クルトです。』

「よつ、雪織だ。久しづりだな。」

『ええ、お久しぶりです…』

ん？何やら落ち込んでるな…とするとアレかな。

「どうした？暗い声だが…何か起こったか？」

『ハイ…アリカ様の処刑日が早まりました。今日から10日後です…それで…』

「アリカを助けて欲しい、と？『紅き翼』はどうしたんだ？」

『もちろん彼らにも連絡しましたよ。ですがいい返事を貰えなかつたんですね…』

ふーん…そんな風に捉えたか。

「へえ…面白いこと言つなあクルト。」

『面白いつてなに言つてるんですか！』

「いや、あいつらがどんなやつかまだわかつてねえみたいだな、つて思つてな。」

『はい？』

「なーに、大丈夫だ。まさかあいつらが動かないとでも？それはあり得ねえ。一番近くで見てきた俺が言つんだ。」

『はあ……それでも僕は不安なんですよ……』

「ん~だつたら俺が行つて発破かけてくるから安心しな。じゃなー！」

『え？ ちよ…待つ…』

バキン！

通信用魔法具を碎く。

「どうしたの？」

「ああ、クルトから連絡が来てな。アリカの処刑日が早まつたらしい。で、ナギがウジウジしてゐみたいだからな……」

「ナギたちの所に行くの？」

「ああ。アリカを助けるためにも、な。」

「姉さまを助けてくれるの？ ユキオリ。」

「ん？ 今まで助けなかつたから不思議に思つたのか？」

「うん。」

「えーっとだな、アリカは『災厄の魔女』って呼ばれているのは言つたよな？」

「言つたよ。でもユキオリなら直ぐに助けたんじゃないの？」

「厳しいこと言つなあ… それだとアリカの命を救うことは出来るんだが、名誉は救えないんだ。」

「？」

首を傾げるアスナ。可愛いな。

「お前もアリカが『災厄の魔女』なんて呼ばれるのは嫌だろ？ 何かしたならともかく、何もしてないのにさ。」

「うん。」

「だから名譽を取り戻すために、時間をかけて調べあげた。アリカを無罪にして、なおかつ自由にするためにな。」

「つまり悪人を肅清するための情報を集めるのに時間がかかった、つてわけ？」

「何でそこまで複雑に言えるんだか… まあそういうことだ。」

「でもさ、情報が集まっているんなら今でも出来るでしょっつまり
ユキオリが面倒なんだよね？」

「う…なんつーか、そこまで頭が回るか。まあ確かに面倒なのもあるが、アリカの『気持ち』を救つための舞台がいるんだ。」

「姉さまの『気持ち』？」

「そ。絶望に立たされ、命を諦めた女性を救い出す一人の英雄。アリカ そのための舞台がな。」

「ユキとユキオリって演出家なの？」

「違うな。自動的にその舞台が整うんだ。利用しない手は無いだろ
う？」

「うーん…そういうもののなの？」

「そういうもののなの？」

さてと、メガロ近くの『紅き翼』の基地に行くか。

「よつ、久しぶりだな。」

「うん？雪織ですか。久しぶりですね。」

まず出迎えたのはアル。

「久しぶり、アルビレオ。」

「これは久しぶりですねアスナちゃん。元気にしてましたか？」

「うん。」

「まあいいや、とりあえず入らせてもらひつか。」

中に入ると、ナギ以外のメンバーは揃っていた。とりあえず挨拶をして、ナギはどうしたのかを聞くとウジウジと悩んでいるみたいだ。

ついわけで個室の扉の前。まあやることは破壊なんだが。

バーン！

「よハ、久しぶりに会おつかと思つてたらウジウジ悩んでーじゃねーよー！」

「……ああ、雪織か。」

「なんだなんだお前らじくも無い、何があつたか言つてみなー！」

するとヒポッポッと話し出すナギ。まあ言ひ切っちゃ悪いが悩むことでも何でも無いことだがな。

「ふうん…で?」

「で？って何だよ……」

「お前は何がしたいのさ。俺が聞きたいのはそれだけだ。遮音魔法はかけるから。」

「俺は……その……」

「ああもうじれったい！ほつきしあがれこの馬鹿！…

思考誘導の魔法をかけつつ叫ぶ。「うすすれば…

「俺は大好きなアリカを助けたいんだよー馬鹿っていうことねえだろー！」

「へえ……」

「一やー一やと笑ひてやる。見事に釣れたよ、しかも大物。

「なつ……何だよその顔……」

「『大好きなアリカ』ねえ……」

「なつ……」

顔を真っ赤にして黙りこむナギ。

「お前がやりたいことは分かった。じゃあ皆で遊ぼうよ？俺たちは仲間だもん？」

「で、でも……」

「いいから伝えやがれ！仲間に遠慮する」とねえー。それとも俺が
わざの言葉を伝えよつか？」

「分かつたよ…伝えれば良いんだろ伝えれば…」

部屋の外に出る。

「皆、俺はアリカを助けたい！協力してくれるか？」

部屋が静まり返る。

「フフ…それで悩んでたんですね…」

「水くさいぞ、ナギ。」

「まさか俺たちが協力しないと思つたか？」

「相変わらずの馬鹿弟子じやのつ…」

「へつ…助けたいんなら始めからやがれってんだー。」

「僕も手伝いますー！」

「嘘…ありがとうなー！」

ナギの悩みは解消、脚本は用意済み。

あとは本番を待つだけ、だ。

第十四話～王女救出～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

第十四話～王女救出～

SHADEゴキ

「魔獸[マジック]めぐケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとつてまさに死の谷」

処刑人が処刑内容を説明しています。

「見せしめ」の意味でもあるのでしょうか？

重罪人に對しての恐怖の誇示、つてやつですかね…

「歩け」

「触れるな下郎。言われずとも歩く。」

アリカ王女はゆっくりと、しかし確實に「死」へと向かうために歩きます。

そつとしてたどり着いた飛び降り台。目を瞑り、

「ナギ…せりばじや…」

確かにそつ言って、飛び降りていきました。

さあ、本番の始まりです。

「よーし…こんなもんだろー。」

「な、なんだ貴様！」

ラカンが処刑人の頭を鷲掴みにします。

「おっさん、今からこゝで起きたことは『なかつた』ことになる。いいな？」

「な、何を……」

「むんつー！」

ラカンが着ていた鎧が弾けました。中から氣を膨らませた見たいですね。

「な……『紅き翼』の……ジャック・ラカンだと……？」

「まさか俺だけだと思つてゐるのか？」

そして現れる詠春、ゼクト、アル、ガトウ。

会場は騒然となり、元老院の議員たちは慌て出します。

「貴様ら……今さら何をー！」

「何を？そりや決まつてる。王女を助けただけだ。『千の呪文の男』、ナギ・スプリングフィールドがな。」

「ばかな！いかにあの『千の呪文の男』だろつと谷底からは生きて帰れまい！」

「クククク…アハハハハハ！」

大笑いしたのは私。まさか何もしていないとでも？

「何だ貴様！」

「面白いこと言いますねえ…死ぬのは、あなたたちですよ？」

「何を…」

「ほら。」

スキマ展開、見事に着地したのはアリカをお姫様抱っこしたナギ。

「ナギ・スプリングフィールド、アリカ・アナルキア・エンテオフ
ュシアはここにいる。」

大量のレポートを空中に浮かべる。

「これらはアリカ王女の無実を晴らし、そして」

さらにスキマ展開。無様に落ちてきたのは手足を縛られた真の罪人。

「あなたの有罪を証明するもの。」

次の瞬間、処刑執行人の大半が鎧を外す。

「お前たちを『完全なる世界』の関係者とみなし、今ここで処刑する。」

「馬鹿な… そんなはずは…」

私は一いつ々笑い、一いつ

「あるんですよ。」

転移魔法を発動。罪人は全て谷のなかに、のじつの『紅き翼』以外の人達は安全地帯…もとい、それぞれの家に。

「茶番劇は終わり。さて…」

ナギとアリカの方を向く。

「プロポーズでもしたんでしょう？…お互いに見つめ合ひて。」

「ハハハハ！」つや良いぜ…」

「めでたい事です。」

「馬鹿弟子にも眷が来たんじゃのう…」

「なつ…」

「つ…」

おやおや、一人とも顔を真っ赤にして。

「ユキ。それからここしておいろ。あなたの敵さんのお出ましだ。」

詠春に言われ、飛んでくる戦艦を見る。

「二人はイチャイチャしておいでくださいな。では…

振り返り、告げる。

「の「」の肩どもを潰しますか。」

『おうー』

SIDE Out

SIDE Out

僕は驚きました。

何に、とこうと『完全なる世界』の関係者を全て証拠つきで炙り出し、一斉に処刑するというアイデアを思い付いた事に。

そしてそれを実行するための資料を完全にそろえ、この舞台を作り上げたことに。

情報を操作し、かき集め、それでも僕がまだ出来なかつた事をやりとげてしまつたことに。

そして今、彼女は

「アハハハハハハ！」

恐ろしい笑い声をあげて戦艦を撃墜させていきます。

「ラカン適当に右パンチ！」

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！」

「フフフ…」

「豪殺 居合い拳！」

「『雷の暴風』、『闇の吹雪』…」

他のメンバーも各自の方法で次々と敵を蹴散らしていきます。

「皆さん凄いなあ…」

「やうだなあ…」

タカミチの言葉に思わず返してしまいました。

僕もあの場所にまでたどり着けるのかな…

え？ナギさんとアリカ様？ああ…見たくないんですよ…だって…

「ナギ…」

「アリカ…」

名前呼び合っている上に凄まじいオーラが出ているんですよ…顔が真っ赤になってしまいそうです…「ひ…」

SHIDEユキ

さて、処刑日から数日、公式的にはアリカ王女は『処刑された』ことになりました。

ちなみに『紅き翼』と関係者以外で今回の事情を知る人たちの記憶は消しましたからね……悪いことはしたと思いますが、これについてはクルトに頑張つてもらいましょう。

さて、今は休んでいる訳ですが……

「これからどうしようつ？」

アリカ王女を表に出すことは出来ないことも無いですが、あまりしあくありません。

ちなみに今ここにいるメンバーは私、詠春、アスナといふ奇妙な感じです。

ナギとアリカもいるにはいますが、ずっとイチャイチャしてるのでカウントしてません。

「日本に行きたい。」

「え？」

まさかのアスナの発言。

「日本、かあ…どうしますっ？」

「え？俺に聞いたのか？」

「やつですよ？詠春には木之内さんもいるでしょう。」

「ああ…やつ言へば帰つてないな…」

「木之内さんって、誰？」

「詠春の愛する人、ですよね？」

「う…まあそういうんだが…」

「じゃあ会つてみたい。」

「しかしだなあ…ゲートポートを抜けるのは…アリカ様がな…皆で
いくつもりなんだよ！」

「そこは私がいますし無問題ですよ。皆に伝えてみます？」

「うーむ…そうだな…出来ればそろそろ戻りたい気持ちもあるし…
そうするか。」

「じゃあ決定ですね。今日の夜にでも話してみましょ！」

「日本に行けるの？」

「まあ行けるでしょ！。監禁は良いですし、期待していいと思いま

ますよ?」

「うふ。」

その夜、話すこと立即決定、場所は勿論京都です。
さて、京都ではどうなりますかね?..

第十四話～王女救出～（後書き）

相変わらずうまく終わらせれない…
次回は京都が舞台です。

第十五話～京都到着～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は…

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つから選んで下さい。

第十五話～京都到着～

SHADEゴキ

「リードが、京都。」

「そうですよ。もつとも、山の中ですけど。」

ハイ、とこづけでやって来ました古都京都。

メンバーは私、アスナ、詠春、ナギ、アリカ、アル、ガトウ、タカミチ、ラカンです。

え？ ラカンはゲートポートを使えないんじゃ無いか、ですか？

そうですよ。だから私のスキマで移動したんです。座標さえ認識していればどこにでも行けるのですから。

お金についてはガトウに頼んで調達してもらいましたけどね。

んで、今は詠春の実家もとい屋敷に向かっているわけです。

「それにしても面倒ですね。私も礼儀として結界の前に出ましたけど。」

「余計な侵入者を防ぐためだ。我慢してくれ。」

「身体強化の魔法やら転移魔法とかもただの魔法使いだと使えないようにしてありますし、階段も多いですし…」

「面倒。」

「う…」

「まあ、あの二人には関係無さそうですがけど。」

後ろを向けば、イチャイチャしているナギとアリカ。そして他のメンバーは顔をしかめています。

あ、今の位置関係を図にすると…

アスナ 私 詠春

この間およそ10m以上

ナギアリカ

この間およそ15m以上

アル ガトウ タカミチ ラカン ゼクト

といった感じです。

「姉さま、嬉しそう。」

「まあ幸せなのは結構ですが、ホドホドにして欲しいですね…」

あの美男美女カップルは人目も憚らずに路上キスとかしそうです。
『バカツブルです。

「うと…ぐちぐち言ってたら見えてきましたね。」

大きな門が見えてきました、よつやく到着です。

しばらく待つて、全員が門の前に来たところですぐります。

『お帰りなさいませ、詠春様、雪様!』

原作のあのシーンよろしく、大量の巫女さんがお出迎え。

「は…?」

私は苦笑しつつ、畳然としている詠春に話す。

「私が連絡しておいたんですよ。いつの間にか私も青山家か近衛家に加えられたみたいですが。」

「ああ、そうか…」

横目で納得しきれない顔の詠春を見つつ、巫女の一人にたずねる。

「それで…木之葉さんはどういらっしゃった?」

「木之葉様でしたら…」

「詠春さ…………ん!」

巫女が答える前に出てきましたよ、黒髪の大和撫子が。木之葉さんです。

そのまま詠春に向かって走つていれ…

「の…バカー-----！」

「ぐふう…?」

おお…見事なボディーブロー…氣を纏つた一撃をお見舞いして押し倒しました。

「詠春はん…あんせんはウチとこ'つものが有りながら…」

「」、木之葉…さん?

「」の赤毛の女の子は誰でつか?まさか雪はんとの子供もどきでも言ひつむりかいな。」

「は…?」

こちらを向いた木之葉さん、しかしその口は笑つています。
成る程…寸劇ですか…良じです。のってあげましょ!ハ。

「まさかそんなわけないだるー!…雪もむちゃんと説明してくれー!」

とこう言葉に対しても私は頬に両手を当つて顔を赤らめて

「そんな…あんなに激しかったの?…」

「ぶつ…？」

「どうこうとか、ちやんと説明してくれはりますっ。」

真っ黒なオーラが出てますねえ…これが演技だとこいつのが信じられないとこです。

「詠春とコキはそんな関係じゃない。」

セイヒヤのベられた救いの手、アスナ。

その瞬間、木之葉さんのオーラは一瞬で消えました。

「ええ、分かってますえ。まさか詠春はんにそんな度胸はありますまいせん。」

「木之葉…さん？」

「でもなあ…ウチも心配やつたんやで…せめて一言でもいいから手紙くれたつてええんやないの？」

「その…すまなかつた。」

「セイ、しょーもない寸劇に付き合つてくれておおせいで。」

「いえいえ、私も楽しかったから良こですよ。」

唖然とする観客、途中まで毎ドラ的展開でしたし。

「改めまして、ウチは近衛木之葉、詠春はんの妻になる予定です。よろしくつな。あんせんらが『紅き翼』のメンバーやな？」

「ええ。アルビレオ・イマです。以後よろしくお願ひします。」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。」

「アリカじや。」

「ジャック・ラカンだ。」

「アスナ。」

「ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグと言こます。どうぞよろしく。」

「フィリウス・ゼクトじや。」

「高畑・T・タカミチです。」

とまあ自己紹介。アスナとアリカはもつウェスペルタティアから縁を切つたと言いたいのでしょうか？

「まあ立ち話も辛いやうし、家に入つてゆつくりしてな。」

とこつわけで私たちは中に案内されましたとさ。

第十五話～京都到着～（後書き）

ネギまの漫画の中に「雪」という名の登場人物がいたことに今さら
気づく…

まあ別に良いですねーと開き直つてみたり。

といつあえず中途半端ですが今回はここまで。

以下ネタバレ

次回は両面宿讐を出すつもり……です。

第十六話／両面宿禰、フルボッケ～（前書き）

アンケート実施中です。

ユキの麻帆良での立場は

- 1 教師
- 2 女子寮管理人
- 3 喫茶店などの店主

以上の3つのうちどれが良いか、選んで下さい。

第十六話「両面宿禰、フルボッ」

SHADE ゴキ

詠春の実家についてのんびり過ごし、今は夜。

「ガハハハ！ほら飲め飲め！」

「ちょっと…やめてトモロカソさん！」

「ほらアリカ、あーん。」

「あーん。」

「…ウチも、ほら詠春はん、あーん。」

「ちょっと…何を対抗しようとして…ぐむ。」

「平和ですねえ…」

「アリジヤの…」

「平和なのは良いこと。」

「もうだな、アスナちゃん。」

「ま、ですかよね。」

半分宴会に近い形になっています。

バカツプル×2とラカン、タカミチが中で大騒ぎ、私、アル、ゼクト、ガトウ、アスナは縁側に腰かけてます。

「私は酒は苦手ですけど、どうです？日本酒の味は。」

「うん？まあまあだな。少し度が強いが。」

渋いおじ様が日本酒を飲むのは様になつてますけどね。

「んゅ…」

アスナが私にもたれ掛かつて来ました。

「もう眠い…」

「なら寝ても良いですよ。夜更かしは良くないです。」

「分かった…」

膝枕をしてあげます。よほど眠かったのか、すぐに寝息が聞こえてきました。

「よつ…」

遮音用の結界を張りました。後ろで騒いでいるのが聞こえて途中で起きあられても可哀想ですね。

しばらく時間が経ちました。いや、月をぼんやりと見ていただけなので何分経ったのかは知りませんが。

と、結界に誰かが触れたようです。後ろを向くと、焦っている様子の詠春。

私は枕を出してアスナの頭の下に置いて、結界を狭めて外にします。

「どうしました？」

「ああ、実はリョウメンスクナの封印が解かれてしまつたんだ。出来れば再封印の手助けをして欲しいんだ。」

「リョウメンスクナって飛彈の大鬼神とか呼ばれてるやつですよね？何故京都に？」

「確か1600年ほど前に京都に封印されたらしい。何故かはよく覚えてないが…」

ま、これは気にしたら負けですし…

「良いですよ、手助けしましょう。」

「ありがたい。」

といつわけでやってきましたよ。ナギたちもやって来ましたけど、随分フラフラしてますね…酔ってるんですね？

「つーかでけえなー！」
「！」

「おもしれえじゃねえかー！」

いや、何が面白いのかよく分からぬですよ？

「おつと…」

殴つて来ましたが避けました。まだ封印が解かれて間もないのか、動きが鈍いですね。

「『雷の斧』！」

「ラカン・インパクト！」

ナギの打ち込んだ『雷の斧』で腕の一本が切れました。ってか斬れた腕が消滅つてどうこいつでしちうね？

ラカン・インパクトで大きくふりつけてますし…

「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！」

詠春の雷光剣でまた大きくふりつきました。うーん…私つているんでしょうか？

「再封印したいから動きを止めてくれー！」

「わかつたぜー！」
「おうよー！」

とか言いながらボ「ボ」にしてゐるせじうこいつ」とじょいづね。動きが止まつてないですよ?

まあ良いですけど…バカですし。動き止めるだけならアレが一番でしょ。

「ナギ、ラカン、巻き込まれても知らないですよ!」

「ああ! ?」

「何だつて! ?」

二人が吠えてますが、放つておいても大丈夫でしょう。

「リラ・カ・マギカ・ラ・エレメンタ! ” 契約に従い、我に従え、氷の女王、来れ、としえのやみ、えいえんのひょうが” ! ! !

「ちよつ! ?」

「やべつ! ?」

一人は詠唱を聞いて急いで範囲から脱出。それでもしないと巻き込まれますし。

リョウメンスクナのいる範囲の空間を凍結させました。結果、とりあえず凍りましたが、まだ途中です。

「「おい! あぶねーじゃねーか! 」」

「知りませんよ。動きを止めるのに最適な魔法を使つただけです。」

スクナのまつに向き直り、続きを再開。

「『全てのものを、妙なる冰牢に、閉じよ』『ヒカルセカ』…。」

そのまま氷柱封印魔法。これでスクナの氷付けの完成です。

「これで良いですか？」

「ああ。あとは本山の陰陽師に任せることになりますからな。」

文句を言つて一人は拘束して、スキマで部屋に落としておきました。

私と詠春は普通に帰ります。

「なんじやつたんじや？」

「神の一柱の封印が解かれて暴れそ娘娘たので、動きを封じて再封印しました。」

「神？」

「ええ。両面宿儺という鬼神で、日本だと様々な形で伝承されています。ただ、私が見た限りで言つと鬼としての性質の強いものでしたが。」

「鬼としての性質の強いつてのはビリーハリビリじゃ？」

「えーっと…両面宿儺はある伝承では民からの略奪を楽しむ、とされていてまた別の伝承では民のために別な鬼を討つた、ともされて

いた……筈です。今回は暴れてただけですが、明らかに私たちを攻撃してきたので。」

「やつか……」

え？^{アル}変態はどうしたのか、ですって？

出掛けの前に気絶させて縛つてそちら辺に放つて起きましたよ。

第十六話～画面崩壊、フルボッタ～（後書き）

やつぱり中途半端な気がする…

そろそろアンケートの締め切りが近づいてきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5019y/>

とある私の物語～ネギまに転生ですか？～

2011年11月29日22時46分発行